



嫁ぎ行くきみへ(1)

北広島 古屋雅三知

春来たりて 遠くへ嫁ぎきみなれば 幸多かれと祈りぬ 我は
幾度もの縁はあれど 此の度は二度と相見ぬ別離なりけり
この港 きみの行く街へ船が出る きみも歩きし小樽の港
帰り来ぬ思いで乗せてひた走る 八時五分の普通列車は
わが胸の想い表すかの如く曲がりくねりし小樽海岸

春の雪

函館 水関 清

満ちて来る朝の光を切り裂きて 漁場へ向かう 船脚速し
君送る 宴果てたる繁華街 降り始めた春の雪積む
名に負いし「典」の一字を胸に秘め 励み来し道 花の香に満つ
百年の歴史とともに 姿消す 夕張線と釧路の「炭鉄」
春開けて秒針光る 花時計 待ち人来る時を報せぬ

引退

旭川 稲積 文子

引退と決めしその日の年号は 令和と決り九十の春
引退で贈られし花が並べられ 吾れにやさしく語らんとする
小さな部屋に好みの本並べ 吾が部屋と決めて心安らぐ
現実を逃れる如く運転し 夫をさそいで来し十勝岳
十勝岳の麓は未だ清らかな 雪に囲まれ夫と佇む

冬の名残り

江別 三宅 浩次

北国は北国なりの暮らしあり憐れむことも悔いることもなし
この寒さ観測史上初という報道聞きつつ窓外を見る
屋外は寒かろうに屋内はシャツ一枚のぬくもりがあり
残り雪に冬の名残りは刻まれてこの北国に春は近づく
冬という試練を超えて北国の人びとは皆忍耐を知る

ザゼンサウ

札幌 浜島 泉

雪どけのザゼンサウをと求めしに 深雪にして掘るもかなはず
ビル陰に朝日隠れつ 川筋の風は冷たし山より来しか
雪積り道狭まりつ 乗用車迫り来たれば避けて通しつ
ポプラ道綿毛の前にシラカバの花散る 奥に木立のありて
昨日は過食なりしか 朝食を控へしもなほ食後が重し

仙境に遊ぶ

釧路 兎玉 昌彦

東京に里帰りの妻見送りて日毎にたまるパックと空瓶
店頭にあふれる本を手に取りてあらぬ世界をさ迷いてあり
学校で習ったことのかたは身につかなかったがいま復習中
この世にはドキドキすること驚くこと沢山ある筈 学問道楽
読まないが手元において眺めんとツン読三昧 病膏肓